

能登半島地震における 亜急性期から慢性期のDMAT活動報告

岩手県立胆沢病院

1)看護科, 2)泌尿器科, 3)呼吸器内科, 4)リハビリテーション科 5)事務局
小嶋麻衣¹⁾ 忠地一輝²⁾ 小野寺克洋³⁾ 小野寺真知子¹⁾ 三田涼¹⁾ 菅原寛⁴⁾ 古館篤⁵⁾



はじめに

2024年1月1日に発生した能登半島地震の際、当院は約3週間後にDMATを派遣した。本報告では亜急性期から慢性期の活動について述べる

活動内容

1、特別養護老人ホームAの搬送支援

1) 1日目

- 被災状況の聞き取り
- 入所者19名の情報収集
(名前、年齢、搬送時に配慮が必要なこと等)
- 情報のデータ入力
- 搬送時混乱が生じないよう入所者のネームプレート作成

AからBまでは6時間程かかる見込み
→座位姿勢で耐えられる方を護送
座位姿勢が困難な方を担送



2) 2日目

担送の11名をヘリで搬送



3) 3日目

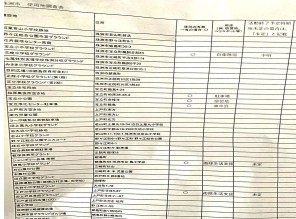
護送の8名を民間救急車で搬送



入所者の健康状態の確認、搬送トリアージ・リストの作成、搬送班との連絡調整、入所者の引継ぎを行った

2、珠洲市内の使用地調査

珠洲市内の公園やグラウンド等の使用状況や現場状況を調査し、施設巡回班本部に報告



本部から提示されたリストと地図アプリGoogle mapを突合させ、自分達で持ち寄った地図に落とし込み位置を確認
この地図は後々活動するDMATも参考にできるようにした

マンホールが突出していたり、道路に瓦礫が散乱しており、調査活動は危険を伴う任務となった



考察

- ◆高齢者や障害をもつ人々の搬送は、災害時最も困難であり専門的な支援を要する
今後被災地の状況に応じた柔軟な対応が求められる
- ◆被災地内のインフラや施設の使用状況の把握は、DMATの活動においても重要だが車での移動は危険を伴う
ドローンの活用など、より安全な調査方法の活用が期待される
- ◆亜急性期・慢性期支援は被災者の健康管理や精神的ケア、インフラの復旧など多岐に渡る
発災直後の対応が終了した後も医療機関や支援チームが継続的に関与する事が重要

結語

今回の活動報告は、亜急性期から慢性期の医療機関や支援チームが関与する事の重要性を再認識する機会となった